上野則男のブログ№84　2015 年 9 月

- **原発事故の責任はだれにある？？**
  事故当時及びその前の経営者にも責任はありますが、私の意見では福島原発を建設した時の責任者の責任が一番重いという主張です。

- **終戦７０年、少し歴史を見直しましょう！！**
  台湾出身の黄文雄氏の第２次大戦における東南アジアに対する日本の貢献を評価するレポートの紹介です。かなりこのことは一般に認められてきましたね。

- **「戦場体験　無言の記録」日本軍の非行**
  日本軍は特攻隊で勇ましかっただけでなく、かなりの残虐非道も行ったという「下手人」の苦しい自白を集めています。
  戦後、その人たちは人に言えず悶々としていたことが語られています。

- **最近の渡部昇一さんのご意見の紹介です**
  致知８月号・９月号で日本の安全保障問題について開陳されたご意見の紹介です。

- **新国立競技場　見積りの問題点は何か**
  国民のほとんどが呆れかえる見積り金額の変遷についての本質的問題点を解明します。

- **私の新製品発明「ぎっくり腰矯正器」**
  今月で唯一楽しい内容です。
  ぎっくり腰を患う方は是非ご自分でも作ってみてください。なぜこれができたかの解説は面白くないかもしれません。悪しからず！

- **新事業創造支援プログラム！そんなものあるのですか？**
  私が「ぎっくり腰矯正器」を「発明」した手法の紹介セミナがあります、というご案内です。
  発明好きの方はこのセミナにお出でください。

561	原発事故の責任は誰にある？？
№84　2015 年 9 月	

【このテーマの目的・ねらい】
目的：
- 福島原発事故の責任はどこにあるのかあらためて考えていただきます。
- その原因は想定外の津波が来たことではない、そもそも必要な対策をとらなかったことにあることを知っていただきます。

ねらい：
- なぜ、このような真実から世間の判断がずれてしまうのかを考えていただきたく思います。

２０１５年７月末、検察審査会は、東電の勝俣恒久元社長ら旧経営陣３名を福島原発事故の刑事責任を追求すべきという判断をくだしました。

この問題では、「福島原発告訴団」が２４年６月、東電や政府の関係者ら計４２人について「津波対策を怠った」として業務上過失致死傷罪などで告発しましたが、
東京地検は２５年９月、「予見は困難で、刑事責任は問えない」として全員を不起訴としました。

検察審査会は２６年７月、
勝俣元会長ら３人について起訴相当を議決し、議決を受けた東京地検の再捜査でも３人は不起訴となりました。

そこで、検察審査会が２回目の審査をしていました。
２回に亘って起訴相当の判断が行われると強制起訴となるのです。

強制起訴が決まったことを報じた８月１日付の日経新聞はこう報じています。

公判での大きな争点の一つは、福島第１原発に
全電源喪失が起きるほどの巨大津波が襲来することを
予測できたかどうかだ、としています。

2008 年に政府機関の地震予測で、明治三陸沖地震並みの地震が起きた場合、福島第１原発に到達する津波の高さは１５．７メートルになると試算されていたことから、検察審は「予測できた」としています。

もう一つの争点は、東電が防潮堤の強化などの対策をとっていれば、今回の事故は防げたかどうかという点だとしています。

検察審は、安全対策を検討しその間だけでも運転を停止していれば、あるいは、海面から１０メートルの敷地上に１０メートルの高さの防潮堤を作る、
浸水を前提として小型発電機を高台においておく
などの対策をとれば事故を防げたとしています。

私はこの事故の原因を早くから以下のように決めつけていました。

2011/5/18	福島原発の事故およびその被害拡大原因

１次原因は、そもそも何が悪かったのか、です。
それがなければ事故は起きていません。

こういう原因を品質管理の世界では、発生原因（もともと起きてしまった悪いこと）と言います。

１次原因は、原子炉の冷却等を行うための予備電源が使用不能になったことです。そのために燃料棒が高熱になり水素爆発等を起こしています。

予備電源が使用不能になったのは、予備電源が完全防水になっていないタービン建屋に置かれていたからです。
この時に技術導入した原発はＧＥのもので、
ＧＥの原発は海岸沿いにはありませんでした。

ついでに言えば、冷却用の海水を取り入れる装置も密閉状態ではなかったのです。

電源等が回復した福島第２原発では３月１４日１９時前に冷却に成功し、その後何らの問題も起こしていません。

（今回上野記）
ほぼ同じ環境にある第２では全く問題が起きていないのですから、第１と第２の設備の差が事故原因なのです。

福島原発事故は、原子炉または原子炉建屋が水をかぶって運転不能になり事故が起きたのではないのです。

原子炉建屋は全く問題ありません。
予備電源が水をかぶったことが事故原因なのです！！

素人の私が言うことは信用されないかもしれません。
しかし、２０１２年７月に大前研一さん（原子核工学科の修士です）が出された「原発再稼働最後の条件」で
第１と第２の予備電源の差を検証し、予備電源の不備が致命傷なったことを述べておられます。

第２原発の予備電源は防水が完全な原子炉建屋に置かれていました。

電源が回復して本来の冷却機能が働けば、最短で１時間、長くても２時間半程度の冷却で安全な冷温停止状態にもっていけるのです。

たったこれだけのことができないばかりに大騒ぎになってしまっているのです。
今回の事故の発端は予備電源をタービン建屋に設置した、というそれだけのことなのです。

そうなのですよ！！こういうことを
「千丈の堤も蟻の一穴から」と言うのでしょう。

２次原因は、なぜ１次原因がそのまま見過ごされてしまったのか、という原因です。
品質管理等の世界では流出原因（発生原因がそのまま外に出てしまった、という意味）と言っています。

今回の場合の２次原因は、ほぼ同じ環境（海岸からの距離や海抜高）にある隣の第２原発の建設時に実行したことを、なぜ第１原発についても対応をしなかったのか、ということです。

第２原発では、予備電源を原子炉建屋に置いたのは、
予備電源の重要性を認識してのことでしょう。
それだったら、第１原発も変更すべき、
と考えるのが常識的判断ではないでしょうか。

どうして放置したのでしょう。
これは解明されるべきです。

おそらく、第２原発の設計検討途上で、予備電源の発電機を原子炉建屋内に置くことにしたときに誰かが、
「第１原発は、今のままでよいのでしょうか」
と発言したのではないでしょうか。

ところが、その時の責任者が、「いいんだよ。どうせそこまでの震災が発生することはないんだから」というような無責任な発言でその問題提起をもみ消したのではないでしょうか。

この責任者と、第１原発の設計責任者は、万死に値する重大責任者です。今のこの大惨事はすべてこの二つのことから始まっているのですから。

事故が始まってからの対応が多少まずかった、などは、この二人の責任に比べれば本当に微々たるものではないでしょうか。

ということからすると、本当の責任者（ワル）は上記の二人ですが、2008 年頃にでも、その気になれば
予備電源の設置場所の補強ができたはずです。

したがって、「その気にならなかった」ということでしょう。

しかし、2008 年に津波の予測情報があったのですから、
その情報がトップに行かなかったのか、
それを無視したのならやはり経営責任でしょうね。

私は、この後、各原発で堤防を作っていることに
「そんな無駄なことをするな！」と異を唱えてきました。

津波を避けるのではなく、津波が来ても浸水されない設備にすればよいのです。すでに、原子炉が入っている原子炉建屋は完全防水なのです。

他の設備の完全防水化などは大したことではないでしょう。その方がはるかに安くて確実な対策なのです。

なぜそんなことが分からなくて、世俗的な意見に流されて堤防など作るのでしょうか。憤慨！憤慨！！です。
誰が悪いのでしょうか？誰がバカなのでしょうか？？

8 月に運転再開した川内第 1 原発の安全対策は、第 2 と玄海原発を合わせて 3 千億円だそうですが、防水対策が中心のようです。

詳しくは分かりませんが、福島原発の教訓から学んだと言いますから、余計なことをしていないことを願います。

今回起訴される旧経営陣の責任がどうなるかは、法廷での判断次第でしょうが、福島原発事故は、津波が原因ではなく、人災（人間の抜かり）であることは間違いないのです。

私の本件に関する意見の集約は以下をご覧ください。

2012/7/31	福島原発事故の原因－上野見解最終集約

http://uenorio.blogspot.jp/2012/07/blog-post_31.html

562	終戦 70 年、少し歴史を見直しましょう！！
№84　2015 年 9 月	

【このテーマの目的・ねらい】
目的：
- 戦後の歴史観を見直しましょう。
- 中国への歴史的貢献を再確認しましょう。

ねらい：
- 戦後植えつけられた歴史観から脱却し、日本近代史を見直していきましょう。

終戦７０年です。

戦後歪められた歴史観、あるいは行き過ぎた日本悪人論を見直す機会です。

歴史を見直すという目的でたいへんな努力を重ねてきているのが「史実を世界に発信する会」（SDHF、英文名 SocietyfortheDisseminationofHistoricalfact）です。

その事務局長を私の畏友　茂木弘道氏が担当しています。彼は、「正しい史実を世界に発信するのだ」という思いで、全生活をなげうって活動しています。

同会は定期的に Newsletter を発行しています。

その９４号（2015 年 4 月 22 日発行）で黄文雄氏の「中国は日本に感謝し、靖国に参拝せよ」の論文を紹介しています。

この論文は英訳され世界に向けて発信されています。

8 月 5 日付の「史実を世界に発信する会たより」ではアメリカの歴史研究者、ジェイムズ・モーガン氏から「貴兄の２０世紀の中国と東アジアの歴史の捉え方に驚嘆しました。

私がこれまでに読んだ中で最も独創的で説得力に富むものです」という感想が黄氏に寄せられたことが紹介されていました。
SDHFNewsletterNo.94J 中国は靖国に参拝せよ

以下は茂木事務局長の紹介文です。

過激な事を言っているように感じる方もおられるかと思います。しかし、黄文雄氏のこの主張は、明確な論拠をもったものです。

黄文雄氏は言ってます。
「日本軍は中国やアジアに対して侵略、虐殺、暴行、略奪を働いたというのが中国側の主張であると同時に、戦後日本人の一般的な歴史認識でもあるが、台湾では違う。」

なぜ違うかというと、「台湾人は幸い、東京裁判史観に染まることがなかった」からであるというのです。

「日本の戦争が、まさしくアジアのレコンキスタ（失地回復）であり、それによって欧米植民地勢力が駆逐された史実を”率直“に受け止め”日本が負けたことが悪かった“」と黄文雄氏は台湾の識者と共に認識しているわけです。

この論文は、『歴史通』３月特集号に掲載されたものですが、『歴史通』の許可をいただき、英訳文とともに冊子として刊行することにしました。

これを読めば、日本が謝罪するどころではなく、中国こそが感謝して靖国に参拝しなければならないのが筋であるということが理解できると思う次第です。

以下黄氏の原文の一部をご紹介します（上野）。
黄氏が台湾出身であることを前提に読んでいただくとよいと思いますが、重要な歴史観を提示いただいています。

中国は日本に感謝し、靖国に参拝せよ

要約
内戦停止、農民・飢饉の救済、列強による分割の阻止…
どれをとっても中国は日本に感謝こそすれ、
批判すべき筋合いはない。
侵略？冗談ではない。
愚かな民族を隣人に持った不幸な日本に対して、
謝罪すべきは中国である。

台湾での歴史認識

多くの日本人は、中国に対する感情はともかく、過去の「侵略」については謙虚に謝罪し、反省しなくてはならないと考えているようだ。

最近では日米戦争については日本の自衛戦争だったとの認識がいくらか広まりつつあるが、こと日中戦争に関しては、あくまで「侵略戦争だった」との認識があり、どうしても贖罪しょくざい意識を拭えない。

だが日本および日本人は、いったい日中戦争の何について反省しなければならないというのだろうか。

日本軍は中国やアジア各国に対して侵略、虐殺、暴行、掠奪を働いたというのが中国側の主張であると同時に、戦後日本人の一般的な歴史認識でもあるが、台湾では違う。

これは私自身、幼い頃から聞かされてきたことでもあるが、たいていの知日派知識人は、「日本は悪くなかった。悪かったことといえば戦争に負けたことだった」と考えている。

当時は列強の時代だった。「春秋に義戦なし」というが、この時代には弱肉強食こそが国際社会の法則だった。

弱者は「悪」とみなされ、国家の進取、覚醒、自覚が時代の精神とされていた。「侵略」は第二次世界大戦まではむしろ美徳とされていたのである。

しかし、そのような時代にあっても、日本だけは「東亜の解放」というあまりに道義的な理念、目標を掲げて戦った。

白人による世界的規模の植民地支配の時代における
近代日本の最大の国家的課題は、いかに欧米列強の植民地支配をまぬかれるかにあった。

祖国防衛を図るうえで、もっとも望ましいのは欧米支配の桎梏しっこく［手かせ足かせ］からアジアが解放されることだった。

この「東亜の解放」の理念は終戦後、まず連合国に否定さ

れた。それは当然である。

欧米の植民地勢力にとって、
これほど許容できないものはなかったからだ。

そして東京裁判で「東亜の解放」とは「東亜への侵略」を正当化するための宣伝文句だったと断罪された。

これを日本人は鵜呑みにしてそのまま今日に至っている。だが台湾人は幸い、東京裁判史観に染まることがなかった。

だから日本の戦争が、まさしくアジアのレコンキスタ(失地回復)であり、それによって欧米植民地勢力が駆逐された史実を素直に受け止め、「日本が負けたことが悪かった」というのである。

（中略）
歴史は「勝者」のもの
政治第一、史実は二の次

アジアを裏切った中国
国際法無視の革命外交

反日・排日の罠
中国の内戦を停止させた

中国農民を救済
民衆を犠牲にした中国軍

大飢饉の救済・教育も科挙の廃止と日本留学

北京大学設置に尽力
「対華二十一か条」の真相
故意に歪めて伝える

列強から中国を救った

列強の時代においては、インドや東南アジアが植民地化されて、アジアで最後に残された独立国家は、タイを除けば日本と清国だけであった。

しかし、その清国も英仏独露によって分割される運命にあったのである。

そのような運命から中国を救ったのが日本だった。日本は西欧による植民地化という世界潮流のなかにあって、逆に短期間のうちに列強の仲間入りができた。

時代へのこの対応力は実に驚くべきものだった。
日本は文明開化、殖産興業という西洋文明への改宗に成功し、そして日清・日露戦争で国家存亡の危機をみごとに乗り越えたのである。

ことに日露戦争については、国家防衛の戦いというだけでなく、アジア防衛、有色人種防衛のための戦いであった。

このことは、もし日本が戦いに敗れていたら世界はどうなったかを考えてみればよく理解できるはずだ。

ところが中国の歴史学者は日露戦争を、単に「日本の中国侵略」としか見ない。

当時の世界潮流、列強間の力学的関係をいっさい見ようとはせず、日本の「侵略の野心」を論ずるのみである。

政治の道具にすぎない中国の歴史学においては、「真実」は重要ではないどころか、時と場合によっては「真実」が最大の敵となる。

もし日露戦争に敗れていたら、日本はロシアの植民地になっていたであろう。

すると大陸はどうなったかといえば、日本というアジアの抵抗勢力がいなくなった以上、ロシアは当初の計画どおりに満洲・朝鮮を版図に組み入れた。
清国も西欧列強によって分割が進められたことだろう。

ロシアはものすごい勢いで南下し、中国には大混乱がもたらされたはずだ。

中国人は日本という近代化支援者を失い、立ち上がる機会は二度と与えられなかったに違いない。

日本以外に列強の植民地勢力に対してアジア解放の戦いを挑むことのできる国など現れるはずもなかった。

日露戦争における日本の勝利が、中国を亡国の危機から救ったのである。たまたま日本が勝ち、ロシアが負けたから結果的にそうなったということでは絶対にない。

それは、中国、アジアを救出しなくてはならないという、当時の日本人の使命感によるものだったのである。

黒船来航後、黄色人種 vs 白色人種の対立図式をいち早くみてとった日本では、東アジア諸民族が同文同種、同俗同習であるという共感と親近感もあって、官民を問わず、「大アジア主義」とでも言うべきアジア共同防衛の構想が形成された。

日本の国益だけを追求するのではなく、「アジアは一つ」の信念の下で、何としても中国の分割を阻止したい、
中国を保全してその再興を待ち、共同でアジアを守りたいというのが当時の日本人の念願だったのである。

これだけは、いくら否定したくとも否定できない史実である。ところが、「支那保全」を目指す日本は、「支那分割」を狙う他の列強諸国とは異なり、欧化した日本を「中華文明の背教者」として蔑さげすんでいた中国人の反日・侮日の嵐に見舞われ、その中国政策は必ずしもスムーズにはいかなかった。

（上野注:東夷の劣後民族として日本を見ていた中国にとって日本に「負ける」などということは到底許せないことでした）

国家主義運動の指導者だった内田良平は、「『保全』といった心やさしい姿勢では、かえって中国人の侮りを受けるだけだ。むしろイギリスのような冷酷で高圧的な態度で臨まない限り、中国人とはつきあえない」という意見書を政府に提出しているが、それは正論であった。

「やさしさ」を「弱さ」と判断する中国人は、日本人を与し易しと見たのである。

心やさしい民族性から、亡国の危機にある中国を救おうとし、中国から愚弄・翻弄されても騙されても、「夷をもって夷を制す」という中国の外交的策略に乗せられても、お人好しにもただひたすら中国の「覚醒」を信じつづけて、結局、戦争に負けたのが日本という国であった。

日本は蒋介石に対し、アジアの和平の確立を訴えつづけてきた。しかし、中国はあくまで自国内戦の都合から、アジアの和平どころか、英米植民地勢力を引きこんで日本と対立させ、さらには自国の内戦に日本勢力を巻き込んでアジアを混乱の淵に陥れたのである。

なぜ中国は自国の分割を阻んでくれた日本に反抗し、分割の野心を抱いていた西欧列強にばかり歩み寄っていたのだろうか。

それは、中国人には国家防衛の大義というものがまったくわかっていなかったからだ。

このような愚かな民族を隣人に持ったことは、日本にとって大きな不幸だった。
「謝罪」すべきなのは日本ではなく中国なのである。

最近の情報で（８月９日付け日経新聞「東南ア、溶けた反日」）東南アジアの各国の対日感情が好転している、と書いてありました。

しかしもともと国によって差はありますが、基本的には欧米の植民地支配から解放してくれた日本への感謝の気持ちがあります。

その点が黄さんの指摘する中国と異なる点です。

563	「戦場体験者無言の記録」　日本軍の非行
№84　2015 年 9 月	

【このテーマの目的・ねらい】
目的：
- 第２次大戦の日本軍に残虐非道の行為がかなりあった（らしい）ことを知っていただきます。
- 中国に対してそのことは謝罪しなければならないことを認識していただきます。
- 戦争はいかに人を狂わせるかを考えていただきます。
- なぜ、そんなことが起きたのかを考えていただきます。

ねらい：
- それぞれで考えていただきます。
- 戦時の「事実」にご関心ある方は「戦場体験無言の記録」をお読みください

これは著者保坂正康氏が、執念で長年の調査・情報収集を行った結果の報告です。たいへん貴重な記録です。

日本軍の残虐非行もかなりのものだったということが分かります。

本書にこういう記載がありました。

中国語が堪能なため中国戦線に送られたのだが、そこで鵜野（中尉）に与えられた役割は捕虜の中から共産党員あるいは共産党シンパを見つけて、その捕虜を「始末」することだったのである。

「始末」の意味は、曖昧な表現であるが、ほとんどの場合「殺害せよ」と同義語であった。
鵜野はその職務に忠実であった。

彼は私への直話の中で、自分は２８人の捕虜の処刑を行ったと語った。

「自分でですか」という問いに、
「そうだ。誰かがやらなければならないことだった」
と鵜野は告白し、そのうえで
「日本刀で惨殺するということだー――」と言って、その処刑の内容を詳細に語った。

その様相があまりにも残酷なので、私は嘔吐しそうになったほどだ。

以下は鵜野氏の著書「菊と日本刀」（１９８５年）からの引用です。

記述内容は、１９５６年の中国の特別軍事法廷における裁判での状況です。

９人の農民が、ある人は泣いて助命を乞い、
ある人は敢然と涙とともに抗日歌を歌い、
またある人は激怒して大声で抗議するのを、
１人ずつ斬首していった情況。

それに刀の目釘が何度もゆるみ。
また刀身が曲がったのを血のりを拭きながら
１人斬首するごとに布を巻いて
直しながらの斬首過程を陳述するなかで、
言葉につまり、とめどなく流れだす涙をぬぐいながらの陳述は、障害忘れ得ぬ苦しさであった。

また別の個所にこういう記述もありました。

「日中友好元軍人の会」の事務局長を務めていた
永井洋二郎氏の著者に対する証言として記載されているものです。

会員のある将校が自分たちの部隊が行った行為について永井氏に告白したという。

「いわゆる南京虐殺にかかわった部隊の将校は、
こうした記憶を幾つも自らの中に抱えているという意味での重要な証言なのです。

倉庫の中に中国人を大勢詰めこんで、そこから何人かずつ引きだして揚子江の前に並べて機関銃で次々に殺害したのです。

むろんここには兵士だけではなく、一般市民もいたわけですが、何隻かの船のスクリューを早くして川の流れを強くしていたので、死体は次々に川に流れていきます。

それを終日続けた。死体は揚子江から海に流れていったことにより、その数は正確には分かりません。

こういうケースは伏せられています。
なぜなら当事者が口にしないからですが、その分だけ彼ら兵士、将校の中には戦後になってもその記憶から抜け出ることができずに

苦しんでいる者がいるのです。

日中友好元軍人の会（現在は日中友好八・一五の会と称している）については、代表幹事の沖松信夫氏（元職業軍人）がその会報３４０号（１９９８年３月号）で以下のように述べています。

日中友好元軍人の会は、１９６１年に設立された。
当時この名称は、会の性格を表すユニークなものだった。

第一、日中友好運動は、当時日本政府の認めようとしない運動であり、右翼団体からは非国民・売国奴の集団として非難された時代である。

第二に、当時は元軍人の敗戦責任を問う声も少なからず、一般的には元軍人を名乗ることが憚られた時代である。

その時代にあえて過去の侵略戦争を反省し軍備を否定する元軍人の団体であることを表明することは、二重に勇気を要する行為だった。

日中友好と元軍人の語を組み合わせた会名は、当時としてはその性格を極めて鮮明にしたものであった。

そんなひどいことがよくできたものだという衝撃的な内容です。

残虐行為をした多数の当事者からの聞き取り等
に基づいていますので、これは真実だろうと思われます。

ただ、韓国女性の人狩りをして慰安婦にした、という吉田清治の自白懺悔がまったくの虚構だったという例もありますので、真実であるという断定はできませんが――

ですが、真実とするとなぜそんなひどいことができるのか、という疑問が湧きます。

戦闘の場では食うか食われるかですから、
敵を倒すのは自然な本能に基づく行為です。

しかし、民間人を虐殺暴行することは、戦時においても違反行為です。民間人の虐殺では、最も有名なのがナチスのユダヤ人虐殺です。

イスラムのテロも民間人が対象になっています。

戦争ではありませんが、オーム真理教のサリン事件も無差別殺人です。

こうして見ると、このような非人道行為の背景にあるのは、宗教またはそれに準じた価値観です。
日本軍の場合は、宗教ではありませんが、
ある意味の「神がかり」です。

特攻隊の戦士は「お国のため」と言って死んでいったのです。上官の指示だから従うのではなく、抽象化された「お国」（神様）の命だったのです。

宗教に対する信仰はすべての価値観に勝るということです。

洗脳という言葉があります。他の価値観をサッパリ洗い流してしまい、新たな価値観を埋め込まれるという意味なのです。

人道も倫理も道徳もなくなってしまいます。

別項でご紹介した「ドイツ帝国が世界を破滅させる」のエマニュエル・トッド氏の分析だと、ドイツと日本は（個人主義ではなく）集団主義的で上の言うことを素直に聞く（お上（かみ）に従う）傾向があると言います。

その面でも上の命令は絶対で、そこに個人の判断は入りにくい、ということがあるのでしょう。
（私は日本軍の残虐非道を弁護するというつもりはありませんが）

また別項「シベリア抑留記『生きて帰って来た男』」でご紹介した小熊英二さんはこう言っていました。

第２次大戦でドイツ軍の捕虜になった
ソ連軍の将兵５７０万人中
前線での虐殺や悪待遇で２００万人～３００万人が死亡
死亡率６割　　ドイツ最悪！！

ソ連軍の捕虜になったドイツ軍の将兵３３０万人中
死亡者は１００万人で死亡率は約３割

日本軍の捕虜になった英米軍の死亡率は２７％、
（日本軍もそんなに悪いのか！）

日本軍の非道さは、日本で極悪の典型のような見方をしているソ連と同じです。
やはり日本軍はかなりのワルなのです。

それにしても、日本軍がそんなに非道であったのならやはり真剣に謝罪しなければなりません。

ところですべての特攻隊員が進んでお国のために命を捧げたのではないようです。

「きけわだつみのこえ」に収録されている以下の文章に著者も大きな感激を受けています。
２２歳の大学生の遺言の最後の部分です。

明日は自由主義者の一人この世から去っていきます。
彼の後姿は淋しいですが、心中満足で一杯です。

云いたい事を云いたいだけ云いました。
無礼を御許し下さい。

ではこの辺で。出撃の前夜記す。

こういう記事もありました。

特攻機のパイロット席の無線は常時オンになっていて、
管制官側は状況を把握していました。

そうすると、「天皇陛下万歳」とかだけでなく
「海軍の馬鹿野郎」などの言もあった。

ところで、第２次大戦の米軍の都市空襲・原爆投下も無差別殺人です。これは宗教のせいではないでしょう。

ではなんでしょうか。
私のみるところでは目的思考でしょうね。

「これ以上米国民の戦死者を出したくない」
「早く日本の影響力を地球から抹殺したい」
「それには手段を選ばない」
という思考です。

米国流の目的思考は、まさに
「目的のためには手段を選ばない」のです。

人間が「おかしくなる」原因は、
「おかしな」宗教か「おかしな」価値観なのです。

本書は以下のような章立てになっています。

著者が伝えたいのは、こういうことです。

- ▶ 戦争がいかに残酷で厳しいものであるか
  これを現代・後世に伝えよう。
- ▶ 戦争体験をした者は戦争体験を語りたがらない
  戦後、戦争が全面否定された。肩身が狭い
  苦しい厭な思い出である
- ▶ そのため、戦争体験者は厭な思い出を自らに抱え込んで苦悩している
  その人たちに対する社会的ケアがされていない。
  冷たい日本社会である。

第１章	「きけわだつみのこえ」と戦後社会
第２章	日中戦争の実態を伝える
第３章	元戦犯たちの苦悩
第４章	軍隊と性の病理
第５章	衛生兵のみた南方戦線
第６章	個人が残した記録 フィリピンでの憲兵隊の島民虐殺事件も記されています。
補章	兵士の戦場体験をいかに聞くか

私は、非常に「厳しい」内容なので、暗澹とした気持になり途中で読むのをやめました。

ところで、前掲の１９５６年の中国の特別軍事法廷における裁判の結果は、被告は自ら全員死刑を覚悟していたのですが、
何と最高刑でも禁固２０年（禁固年限には終戦からの期間を含む）の温情判決でした。

それは、当時の国家主席側（毛沢東、周恩来）の「配慮」だったようです。

これはビックリの新事実でした。

「死刑ではなく有期刑にして日本に送り返せ、その上で、日中友好に貢献してもらえ」

凄い戦略的思考ですね。今の日中関係を考えると彼我の差がありすぎです。戸惑いを禁じ得ません。

564 最近の渡部昇一さんのご意見の紹介です

№84　2015 年 9 月

【このテーマの目的・ねらい】
目的：
- 「愛国者」渡部昇一さんの最近の発言を確認しましょう。
- 今の日本の危うさを再確認しましょう。

ねらい：
- 日本の安全保障を真剣に考えましょう。

私は雑誌「致知」に連載されている渡部昇一さんの
「歴史の教訓」を毎号楽しみに読んでいます。
このために致知を購読していると言えるくらいです。

渡部さんのご意見は、ほとんど反対するところがありません。

久々に渡部さんのご意見をご紹介します。
以下太字は渡部さんの文章そのままの部分です。
太字でないのは私が要約等をして解説している部分です。

この２か月の渡部さんの主テーマは日本の安全保障問題です。

８月号の見出しはこうでした。

集団的自衛権の確立こそ帝国主義的横暴に対する最大の抑止力である。
憲法改正はそのためである

冒頭の要約文はこうなっています。

南シナ海がきな臭い。
その南沙諸島の岩礁を埋め立て、
軍事基地を建設すると中国が明言したのだ。

東南アジア全体の安全保障が揺らぎ、
一触即発の緊張状態が出現することは避けられない。
日本はいかに対処し、何をなすべきか。

その答えはどうなっているのでしょうか。

まず現状の確認です。
中国の帝国主義についてこういう記述があります。

大東亜戦争以前のシナは、欧米の帝国主義に蚕食され、ひどい目に遭ったといえます。

シナのこれといった都市にはシナ人が勝手に住むことのできない欧米各国の租界があり、シナ人の出入りが許されない公園があり、という具合でした。

現在の中国のあり方を見ると、その底の底にはこの時期の怨念が積もり積もって堆積しているように見えます。

中国を遅れてきた帝国主義国家にしている根源には、このことがあるのでしょう。
（上野注：興味深い見方です）

しかしいま、帝国主義的横暴を容認する国はひとつもありません。

いまの中国は紛れもない経済大国です。
（中略）
なのに帝国主義を露わにして国際社会と対峙する姿勢に頑なにとじこもる。なぜなのでしょうか。

その理由として、
独裁国家として指導層が権力を維持しようとすれば、
　１）国民を反対勢力とならないように弾圧する
　２）国の外に敵をつくり、国民の不満をそこに向けさせる。
ことになるのです。

南沙諸島の中国の動きに対して反対する国は「恰好な敵」です。

しかしこの緊張が大きな戦争状態を引き起こす可能性があることは、第１次大戦を引き起こしたオーストリー皇太子夫妻が射殺されたサラエボ事件が示しています、と言います。

南沙諸島の紛争が起きれば、尖閣諸島にも影響するでしょう。

この時力を発揮するのが集団的自衛権です。

安倍首相の打ち出した集団的自衛権の確立、
これこそが中国の帝国主義的横暴に対する
最大の抑止力だからです。

中国はそう宣言しているのだから、岩礁の埋め立てはさらに進め、軍事基地の建設に持っていくでしょう。

フィリピンやベトナムとの間に小さな紛争があるかもしれません。だが、東南アジア諸国の側にはアメリカがいますから、それ以上に出られるかどうか。

そこに現行憲法を改正して集団的自衛権を確立した
日本が加われば、鬼に金棒です。

尖閣諸島の問題も、中国は犬の遠吠えを聞かせるくらいが精一杯、ということになるのではないでしょうか。

この後、４月２８日の安倍首相のアメリカ上下院合同議会での演説が日米の関係強化に大きく貢献したことに触れています。

そして総司令官を解任され帰国したマッカーサーが米議会上院軍事・外交委員会で「日本が戦争に入っていったのは主として自衛のためであった」という証言をしたことに触れています。（自衛は国の基本的権利であることを言っているのです）

現在の憲法の前文で、「日本国民は、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」と言っていることは、すべてを他人任せにするということで、とても一人前の国とは言えません。

その前提での第９条は無責任な条文で、早く改正して一人前の国にならなければなりません。

実は、これはもっと早くから手をつけるべきでした。
しかし、現行憲法には平和を守るには大きな欠陥があるにもかかわらず正確な知識を置き去りにして、逆に平和憲法の美名の下に第９条があるから日本は戦争に巻き込まれないのだ、第９条を守れ，の迷信が国民の多くを覆っていました。

その迷信を増幅する勢力がありました。
そのために歴代の政権はこの問題に踏み込むことをためらってきたといえます。そこにようやくガッツのある首相が登場したというわけです。

私たちには今、正確な知識に基づいて
冷静な認識に立つことが求められているのです。

「答え」は、早く憲法を改正して集団的自衛権を確立しようということでした。

最後に韓国も道理に目覚めて日韓関係の強化に努力すべき、そのことが中国に対する抑止力になるとも付言しています。

９月号の見出しはこうです。

デモクラシーは脆い。
そのことを知り、備えなければならない。
備えあれば憂いなし。
それが集団的自衛権の確立だ

その冒頭の要約文はこうです。

デモクラシー発祥の地アテネが、マケドニアから出たアレキサンダー大王に蹴散らされた。
デモクラシーを享受するフランスが、ヒトラーに席巻された。

歴史はデモクラシーの脆さを教えている。
ならばいま、いかにして日本を守るべきなのか。
その答えは紛れもない。

その答えは何でしょう。

まず第１次大戦後の状況に触れています。
　ドイツは過酷な賠償金を課せられ、
　世界恐慌も押し寄せ貧弱のどん底にあった。

　その時ヒトラーは高速道路（軍用にもなる）を造り、
　近代的な機械化部隊をつくり上げ、
　飛行機の生産に拍車をかけた。
　この軍備増強過程で失業問題も解消されていった。

かたやフランスはどうしていたか。

フランスの議会はスキャンダル騒ぎで湧きあがっていました。政敵の愛人探しに熱中し、それを材料に相手を攻撃する。専らそんなことをやっていたのです。

イギリスも似たようなものでした。

その結果、再び戦争が始まったら、あっという間にパリ陥落、イギリスもダンケルクから追い落とされてしまいました。

今の日本の国会の安保論議は
枝葉末節の技術論に終始している。
当時のフランスの状況と同じである。

さて今の日本です。近隣を見てください。毎年軍事予算を膨らませ軍備増強に励んでいる国があります。

その国は本土から遠く離れた南シナ海に人口の島を造って自国領と主張し、飛行場を建設して軍事基地にすることを明言しているのです。

**そしてその国はデモクラシーの国ではありません。
共産党独裁の国です。**

**もはや１点の疑問の余地もありません。
日本は第２次世界大戦前のフランスと相似形の状況にあるということです。**

**そのことが認識できたら、やるべきことは明らかです。
隣国の暴発を抑止する力をつけなければなりません。**

**それが安倍政権が意図し、
努力を傾けている集団的自衛権の確立です。**

**にもかかわらず、国会でなされている議論と言えば、
集団的自衛権は憲法に違反する、いやしない、といったことばかり。気楽な稼業と言わざるを得ません。**

（以下しばらく上野意見）
そうなのです。
本質は、今の日本の安全を確保するために集団的自衛権は必要かどうかということのはずです。

集団的自衛権が必要でそれが憲法にｊ違反するということであれば、憲法を改正すべきなのです。

しかしそれだと、国民的合意を得るのに時間がかかり、間に合わない、ということから、便法で憲法解釈で逃げようとしているために歯切れが悪く、反って国民の賛成を得られていないのです。

世論調査結果では、今回の安全保障関係の衆議院決定に非常に多くの国民が反対ですものね。

日本の安全を確保するという目的を優先すると多少の無理は仕方がない、という政権の苦渋の決断です。

（ここから渡部さんのご意見）
デモクラシーの国、日本でいかに意思決定が遅いかの事例として、練馬区に外郭環状道路を通すという件を出しておられます。

１９６５年に計画があったのに住民の反対で実現せずに、ようやく最近になって実現に向けて動き出した、のです。

それに対して独裁国家中国では、２０２０年までに総延長１万６千キロの新幹線建設を計画しています。
（日本は現在３千キロ）

おそらくこれは実現するでしょう。地図の上で直線をひいてその線上にかかるところは強制収用すればよいからです。

そもそも新幹線技術を日本から導入したのはついこの間のこと。しかも契約では他国にその技術は出さない、
ということだったのに、「どこ吹く風」で
ブラジルなどで日本のライバルになっている。

こういう国です。うかうかしていたらダメでしょう！！
というのが渡部さんのご意見です。

結びはこうなっています。

**政治の不気味と経済の不気味（この前に解説あり）。
だが、不気味だからと言って、回避する術はありません。
そういう不気味を抱えた国がすぐ隣にあるというのは、
動かせるものではないからです。**

**ならば、国を守るために備えるしかありません。
備えあれば憂いなし、です。
しかし、今の国会議員の多くは「憂いがないので備えを考えていない」ように見えます。**

**国を守るために備えなければならない第１のものは、
本稿で最初から繰り返し述べてきたことです。**

集団的自衛権の確立。これです。

**安倍政権はこれをやろうとしているのです。
安倍首相は今の国会で集団的自衛権を確立するための
安保関連法制を万全にする覚悟だと見ています。**

**また、そうでなければ、
この時期に首相の座にいる意味がありません。**

**国を守る。今はこの一事に集中すべき時なのです。
議員諸君が気楽な稼業を貪っているいることは許されません。**

いや、議員だけではありません。全国民が、国を守るには何をなすべきかに集中すべきです。

このように考えてくると、いま私たちは実に歴史的な時代に生きているのだ、ということに思い至ります。

国民が目覚めよ！！と言っておられるのです。
そうなのです。
早く「安全ボケ」「安全保障タダ乗り」
と言われる状況から脱却しなければなりません。

565	新国立競技場　見積りの問題点は何か？
№84　2015 年 9 月	

【このテーマの目的・ねらい】
目的：
- 新国立競技場建設費の見積りが揺れ動く本質を解明します。
- 見積りの問題点を認識していただきます。
- 情報システムにおける見積り精度向上の課題を認識していただきます。

ねらい：
- もっと見積りに関心を持っていただきます。

新国立競技場の見積りや計画が大幅に揺れ動いています。

８月２８日政府は、新国立競技場の建設費を１５５０億円と決定したと発表しました。

この直前の見積りから冷房設備をなしにして１００億円を下げた、ということです。これで２５２０億円から１０００億円下げたと安倍総理は自慢げでした。

夏の大会で冷房がない？まあ甲子園の夏の大会でも冷房がないのだからやってやれないことはないでしょうが。

それはともかく、分からないのはなぜこんなに見積り額が変わるのかです。

意味や見積り範囲は別として、以下のように見積り額が動いています。

２０１２／１１	１,３００億円	計画
２０１３／１０	３,０００億円	以下見積り
２０１３／１１	１,８５２億円	
２０１３／１２	１,６９９億円	
２０１４／０５	１,６２５億円	
～	３,０００億円	
２０１５／０７	２,５２０億円	
２０１５／０８	１,５５０億円	

２０１５／０７の見積りでは、開閉式の屋根をやめたとか、引き算での説明はされていますが、そもそもどうなのか、は説明されていません。

見積りをするためには、設計が前提となります。
どういうものを作るかが決まって初めてその図面を分解して見積りになるのです。

本件の見積りはずーっと設計はできていなかった段階のです。今もできていません。

詳細の設計ができていない段階での見積りはかなり推定が入ることになります。

その推定の根拠は、類似案件です。

日産スタジアムが６００億円でできたのだから、それに対して規模がどのくらい違う、あるいは開閉式天井がつくとかで足し算・掛け算をして算出します。

その際、まったくの新規技術だと、あるいはどういうものになるか分からないときは、リスクを見ます。
安全を見て多めに見積もるのです。

今回の当初の３０００億円の見積りは、リスクを見た部分が多かったと思われます。

こんな大型案件で工事費が何割も増えたら会社に重大な損害を与えることになります。誰だってリスクを多く見ます。

それにしても、こんなに振れ幅が大きいのはもう一つ理由があります。それは施工技術が分からない人が見積りに関わっていることです。

設計をする人でも施工技術が分からない人が多いといいます。いくらになるか考えずに設計案を作っているのです。

ザハ・ハディドさんもその類でしょう。
予算は１３００億円と言っているのにあんな壮大な案を作って出すのですからね。

審査する方だってコストのことが分からずにデザインの斬新性だけで決めているのだから無責任です。

設計者でもその程度です。ましてそれを依頼するお役人・文官はもっと評価力がないのです。そんな人たちがこねくり回すのですからわけも分からず揺れ動くのです。

若干脇道です。
技術的な評価力がなくても、類似案件のコストくらい知らなければダメでしょう！
見積りについて追求した当時の国会の委員会で議員からの他の案件のコストはどうなっているのか との質問に対してＪＳＣの担当役員が、「把握していません」という回答をしていました。論外ですね。

以上のことは見積りには付いて回る「常識」です。
分からない人たちがこねくり回すからこんなことになってしまうのです。

この不首尾の経緯を私なりに以下の表にまとめてみました。

表1	「見積りが振れる要因」参照

情報システム開発での見積りでも、まったく同じことが毎日のように起きているのです。

「こんなことをやりたい、見積りをしてほしい」
と開発業者がお客様に言われます。

「どんなものを作るのですか」
「まだ詳細は決まっていない、
だから概算でいいから見積ってほしい」

そう言われると仕方ないので開発業者は想定・仮定をして見積ります。

積み上げの見積りができませんから、類似案件からの類推しかありません。分からない部分はリスクを見て上乗せします。

そうするとお客様はその概算で予算措置を講じます。
そうなると、仮の概算数値は既成事実になります。
「予算がこれだけだからこれで開発してくれ」

そうして開発に入ると、追加の仕様がどんどん出てきます。リスクを見た枠もどんどん超えます。

えーっ、それは困ります」とクレームしても
「とにかく予算がそれしかないのでそれでやってくれ」
となるのです。

新国立競技場の見積りと同じことでしょう？
これからも続きますよ。きっと！

表１：見積りが振れる要因		
要因	今回の場合	対応法
1．要件が変わる • この施設を何に使うのか、どのくらいの規模にするのか、定性的ねらいをどうするのか、によって当然ながら実現コストは変わる。	• N万人収容 • 用途（陸上競技、サッカー大会、音楽会、等々） • 敷地面積 • 災害時避難場所 • 日本の技術力を世界にアピールする。	• これが基本要件で、これが決まらなければ、何も決められない。 • 当初これは最大限の希望的可能性を盛り込んでいた。 • 何でもかんでもの施設など実現した試しはない。
2．設計ができていない • 要件が決まって設計になる。 • 設計ができていなくてまともな見積りができるわけはない。	• 今回のザハ氏の入選はデザインコンペでデザインを決めただけで設計は行われていない。 • 2014年1月に基本設計が開始されているが、5月にこの基本設計を基にしたとされる見積りが1625億円である。 • この期間の「見積り」では到底積上げ型の見積りができるレベルにはなっていない。	• この段階での見積りは超概算見積りである。 • 類似案件からの類推となる。 • 前例となる類似案件がない場合は、リスクを見て膨らませた見積りとする（そうせざるを得ない）。
3．建設工事に理解がない人間が見積りに関わる • 前提とか見積り方法を捨象して結果の数字だけを使う。 • 数字の独り歩きが行われてしまう。 • 見積り内容の精査ができず、見積り値を丸呑みしてしまい、前向きの施設・機能の改善検討ができない。 • 施工技術に精通していない設計者の設計は、最適機能・最小費用を考慮していない設計となっている可能性がある。	• 最初の段階の3000億円とか上記1625億円は、この数値で計画とするレベルでは到底ない。 • 文科省や日本スポーツ振興センター（JSC）の担当官は到底技術評価はできない「文官」であったろう。 • 今後の問題になるが、設計技術者と施工技術者の密な連携が納期短縮の面からも必要となる。	• 見積りの前提条件を確認し、見積り値の限界を認識して検討を進めるべきである。 • 超概算見積りを前提に予算化措置などをしてはいけない。

もう一つは、企画または設計ができたあとの見積りの問題です。開発業者はその企画案または設計案に基づき、それなりの方法で開発規模の見積りをします。

発注者は一般的にその見積り値を評価する力がありません。

発注者に開発実務の経験があれば、「何でその部分がそんなにかかるのか」と追及ができますが、そうでないと鵜呑みにせざるを得ません。

多くの発注側企業では、もう長い間開発実務から遠ざかっていますので開発業務の「当たり」がつけられないのです。

「とにかく高いから少し安くしてくれ」
とか言って値切るしか能がありません。

従来の見積りは、開発側では積み上げて見積っていますが発注側から見ると、工事費一式でいくらですという見積り方法だったのです。

もし「何でその部分がそんなにかかるのか」の質問への回答に対する理解力があれば、「だったらこういう仕様に変更してコストを下げよう」という検討も可能となるのです。

「見積りの内訳が見えるようにしよう」ということでファンクションポイント法（開発する機能をベースに見積る方法）が開発され一部企業で実用されています。

ファンクションポイント法は、水洗トイレを３つ作ってくれ。そのトイレには男女共用のウォッシュレットを付けてくれ。

という要求に対して、水洗トイレ分でいくらです、
という見積りです。当たり前でしょう？

これだと「ウォッシュレットは止めようか」
という検討ができるということです。

それでもなぜそんなにウォッシュレットにかかるのか、という疑問は残ります。ウォッシュレットの作り方・設置方法が分からないとそれ以上の突っ込みはできません。

現在、発注者に開発実務の経験をさせよう、という動きも出てきています。

ところでファンクションポイント法は新規開発には適用できるのですがシステムの変更（保守・エンハンス）、つまり以下のような
・和式便所を洋式に変更する
・洋式便器にウォッシュレットを設置する

に適用できるようなファンクションポイント法的な見積りは一般化していません。

これをシステム企画研修社では開発し提供しています。
今までこの方法がなぜなかったのが不思議です。

以上、情報システムにおける見積りの問題点を整理すると以下のようになります。

表2	「情報システムにおける見積りの問題点と対策」参照

ＳＷ式見積り手法に関心ある方はお以下にお尋ねください。
mind-pc@newspt.co.jp

表２：情報システムにおける見積りの問題点と対策		
問題点	原因	対策
• 開発内容が決まっていない段階で見積りを要求される。 • ・ 仕方なしに「適当に」超概算という前提で見積りを出す。 • ・ そうするとそれが独り歩きで確定見積りになってしまう。 • ・ 機能が膨らんでも、提示した見積りの中で開発せざるを得ない。	• 開発内容が決まる前に予算措置を講じる必要がある。 • 開発内容が決まっていない段階で的確な見積りをする方法はない。 • 開発内容が決まってからでも、短時間に正確な見積もりをする手法や能力がない。 • 受注側の交渉力が弱い。	• 見積りを出す際には見積りの前提条件を明示する。 • 前提条件は何らかの方法で定量化か具体化を行い、事後の折衝時に、具体化された要件が範囲内か否かの判断ができるようにする。 • その上で、追加要件は次回回しにするとかの結論に到達するようにする。 • それには、そのつもりで臨む覚悟と交渉力が必要である。
• 変更処理（エンハンスまたは保守業務）に対する機能ベースの見積り法が確立していない。 • そのため、発注側からは、見積りの妥当性を検証する方法がない。	• 見積り方法の研究が十分されていない。 • あるいは、良い方法が共有されていない。	• システム企画研修株式会社ではその方法（SW式工数見積り手法）を開発しているので、それを研究する。

566 私の新製品発明「ぎっくり腰矯正器」

№84　2015 年 9 月

【このテーマの目的・ねらい】
目的：
- 私が考案したぎっくり腰矯正器を知っていただきます。
- 「イメージ思考法」の成果例を知っていただきます。

ねらい：
- ぎっくり腰矯正器が販売されたら使ってください。
- 別項「新事業創出プログラム！そんなものあるのですか？」もご覧ください。

私は時々軽いぎっくり腰になります。

今回は７月１６日になりました。毎朝の散歩ジョギングのときの、ゴール地点の西大井公園での出来事です。

いったん全部散ってしまった「くちなし」がまた一輪花弁を付けたのです。

それで「おや？」と思って地面から３０センチほどの高さだったので屈んであの独特のにおいを嗅ぎました。

そして立ち上がった時にギクッと来てしまったのです。

それでもあまり気にしないで、そのまま普通に走って帰宅しました。その後も少し庭木の手入れをしました。
これがいけなかったようです。

１日休む羽目になりました。その後ほとんど恢復したと思った時に油断して再発してしまいました。
階段の上り下りは苦しいですが、歩行はゆっくりならなんとか、という状態でした。

その時に、八木橋英男講師の「イメージ思考法」のトライアルを仲間うち６人で実施しました。

何のトライアルかというと、別項の「ＩＣＴ活用新事業創造支援プログラム！そんなものあるのですか？」の「新製品・サービスのアイデア出し」のトライアルでした。

６人が２チームに分かれ、それぞれテーマを決めて新製品のアイデア出しをしました。

我がチームのテーマは健康器具でした。
始めた時はぎっくり腰治療器を考えようという気はまったくありませんでした。

もう一つのチームは換気扇でした。これまでにないまったく新しい物を考えようということです。
それぞれ３人の湧いたイメージを合体させて新製品のアイデアに結び付けるのです。

我がチーム３人のうち二人のイメージは合体して一つの物に収れんできそうでしたが、私の分は別に検討することにしました。

イメージ思考法では、潜在意識で３つのイメージを思い浮かべます。

私の脳裏に浮かんだイメージは以下の３つでした。

一つは、温泉まんじゅうのような饅頭です。
二つ目は、海の上を走っている白い帆（ヨット）です。
三つ目は、樹に止まっているセミでした。

これを「意味解釈」して右の写真のようなぎっくり腰恢復器のアイデアとなりました。
早速自宅で作ってみたのです。

前面のクッション材は、１００円ショップで売っている洗面所用などのマットです。
表面が滑りにくいように凹凸があります。

白くぶら下がっているのは、市販の腰用の緊縛ベルト（コルセット）です。

黒い袋状にぶら下がっているのはナイロンストッキングに入っているゴルフボールです。
白と黒のコンビで指圧効果を発揮します。

←裏側です。
コルセットは鋲でとめてあります。
製品にする時は両面テープでとめるようにします。
上下好きな位置にセットすることができます。

上に見えているのは、ゴルフボールが入っている袋を留めている部分です。
自家用なので鋲を使っています。

最下部に二つ見えているのは、板の背部と底部をつないでいる蝶つがいをとめている針金です。
取り外しやすいようにあえて針金でとめています。

背部だけを取り外して使うこともできるようにするためです。

三つのイメージを「これは何を意味するのだろう？」とひねっているうちに「ぎっくり腰の矯正器だ！」と思いついたのです。

饅頭は二つのゴルフボールになりました。海の上を走る白い帆はそのゴルフボールが自由に動けるということを示します。

樹の上のセミは、ゴルフボールを木に留めろということです。しかしすぐに自由に飛んでいけるのです。

ゴルフボールを腰に当てて板とか畳の上で寝るとぎっくり腰が治るということは、散歩ジョギングの途中で某おば様が教えてくれていました。
その時は１回目の恢復中だったので実行しませんでした。

その治療法を椅子に座っていても実施できるという治療器なのです。

この治療器のよさはほとんど既存の部品でできるということです。板と蝶つがいだけは近所のホームセンターで買いました。

自分で使用してみてかなり効果があり、また机に向かっている時の姿勢ガよくなる効果も感じられました。
そこでこれを実用新案として登録することにして現在準備中です。

非常に安くでき、使い勝手もよい、使うのが楽しい面もある、ということなので、近々商品化されることを期待しています。

効能書き
１）腰の痛い部分に自由にボールを当てることができる。 ２）椅子や座椅子の上に置いて使うことができる。 ３）装着が簡単でワンタッチで外すことができ立つことに不自由しない。 ４）かばんに入れて持ち運びすることができる。 ５）姿勢矯正器としても使うことができる。 ６）背もたれ部のマットを楽しい柄にして交換して気分転換することができる。 ７）特注品を使わないで安く製造できる。 ８）マットやベルトの消耗品を継続的に販売することができる。

因みに、このトライアルの時の我がチームの二人の健康器具と別のチームの換気扇は私の製品と違って非常に斬新なアイデアとなりました。
しかしかなり実現は難しそうです。

このように「イメージ思考法」では、
画期的アイデアも現実的アイデアも出てくるものです。

別項「新事業創造支援プログラム！そんなものあるのですか？」もご参照ください。

567	新事業創造支援プログラム！そんなものあるのですか？
№84　2015 年 9 月	

【このテーマの目的・ねらい】
目的：
- ＩＣＴを活用する新ビジネスを考案する画期的なアプローチがあることを知っていただきます。
- その無料紹介セミナが９月１１日にあることを知っていただきます。

ねらい：
- 「ＩＣＴ活用新ビジネス創造支援プログラム」をご研究いただきます。
- 素晴らしい新製品・サービスを考案してください。

８月３日の当ブログ「新事業創造支援者を育成しませんか！」の続きです。

ひとつ前のブログで、私がＭＩＮＤ－ＩＮの手法を使って開発したぎっくり腰矯正器をご紹介しました。

このＭＩＮＤ－ＩＮ手法を使って新製品・サービスを考案するプログラム
「ＩＣＴ活用新ビジネス創造支援プログラム」
の無料ご紹介セミナを９月１１日に開催いたします。

新製品・サービスの考案をしなければならない方、
あるいはその方法を研究しなければならない方
は是非ご参加ください。

セミナのご案内はこちらをご覧ください
http://www.newspt.co.jp/data/semina/bcksemi.pdf

このセミナでは、製品・サービスのアイデアをひねり出すＭＩＮＤ－ＩＮ手法だけでなく、新事業を創案する人材の選抜手法とこれまでの日米中心ですが、製品・サービスの創出１００例以上を収録したデータベースの活用法もご研究いただけます。

このデータベースのサンプルは以下のようなものです。

これによって、

- これまでどんな対象事業領域で
- 誰向けで
- どの対象プロセスを狙って
- どんな技術を使って
- どんなものを作ったのか

を知ることができます。

ＥＸＣＥＬの機能ですが、複合条件で該当するものを抽出することもできます。

これらを手がかりにして、真似をするのではなく新たな製品・サービスを考案していただく材料としていただくためのものです。

ＩＣＴ活用新ビジネス創造支援プログラム全体については、以下のＵＲＬをご覧ください。
http://www.newspt.co.jp/data/mind-pd/bckicker.pdf

#	案件名	実施主体	事業創造パターン		対象事業	利用者		対象プロセス					適用技術									内容
		建設・工事 製造 流通販売 サービス 金融 公共 生活	新ビジネス	新ビジネスモデル		法人	個人	企画管理	現状把握	判断	処置	情報提供	IoT、センサ、M2M	ビッグデータ	ウェアラブル	クラウド、Web、SNS	GPS	タブレット、モバイル	ロボット、AI	3D技術、3Dプリンタ	無線	
63	FAST(光ファイバー・アレイ走査テクノロジー)	米SRIインターナショナル	○		介護医療	○			○			○	○								○	生検標本を探査しガン細胞を発見する。そのガン細胞に各種の治療を施しどの方法が有効かを見つけだす。
64	痴漢を防ぐブラ	インド	○		生活		○				○		○		○		○					携帯電話ネットワークを通じて当局に通報し、GPSが正確な位置を知らせる。
65	ガンを検知するブラ	米FWS社	○		介護医療		○		○	○			○		○	○						代謝パタンを細胞レベルで追跡するセンサーが埋め込まれている。異常を見つけると主治医に通報する。
66	Tシャツ・バッテリー	米スタンフォード大学	○		その他		○				○				○			○				モバイルやウェアラブル・デバイスのバッテリーになる。
67	スマートマスク	米フロッグ	○		健康		○		○				○		○						○	このマスクが大気データを収集する。政府が提供する無料アプリを使って、大気の状況をリアルタイムで表示するホットマップにデータを送信できる。
68	ティーン少女向けペンダント(iロケット)	米ディノ	○		遊び		○				○							○				秘密をiPhoneやiPadに音声認識で入れさせる。その秘密はペンダントを押すと保護される。好きな写真をペンダントと向けに印刷してくれる。
70	パーソナル・コンテキスト・アシスタント(グーグルナウ)	米グーグル	○		生活		○			○						○		○	○			検索、Gメール、マップ、トーク、カレンダー、ドライブ等と密に連携が取られ「ユーザーが必要と思想ナリマインダーカードを要求される前に送る」をうたい文句にしている。
71	パーソナル・コンテキスト・アシスタント(イージリードゥ)	米イージリードゥ	○		生活		○			○						○		○	○			「あなたのスマート・アシスタント」と称している。新しい情報が入るとそれを検知して、ユーザーに代わって更新してもよいかと聞いてくる。などなど。
72	パーソナル・コンテキスト・アシスタント(アトゥーマ)	伊アトゥーマ	○		生活		○			○						○		○	○			ユーザーの日常的なタスクを自動化してくれる。帰宅して家に帰り、ネットワークが3GからWiFiに切り替わった時に自動的に家族やルームメートに到着を知らせることができる。
73	インテンション・エコノミー	米ドクサールズ氏の主張	○		生活	○	○			○						○		○	○			自分の意思(インテンション)を宣言すると、複数の航空会社、ホテル、レストラン、美術館、その他訪れるべき場所から提案が寄せられる。
74	インテンション・エコノミー	米プライスライン・ドットコム	○		生活	○	○			○		○				○		○	○			行きたい場所と予算を投稿すると、複数の売り手が競り合う。